

データで探る 北海道の公立図書館

北海道の公立図書館は、どのような状況にあり、どんな課題があるのでしょうか。ここでは、公表されている統計データに加え、釧路公立大学地域経済研究センターが昨年末に実施した公立図書館の役割についてのアンケート調査の速報などから、北海道の公立図書館の姿を探ってみました。



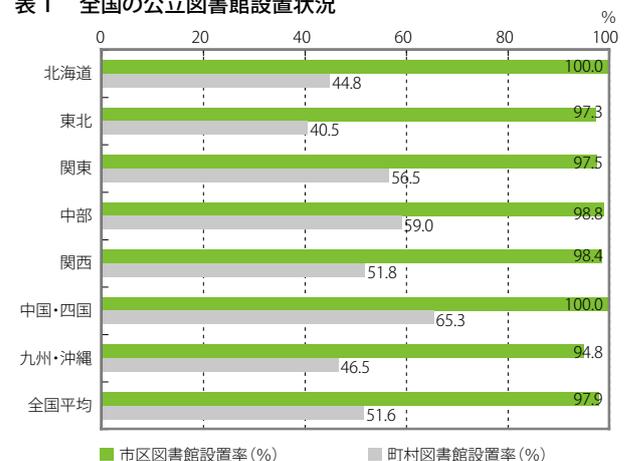
地域格差が大きい図書館設置状況

まず、(社)日本図書館協会発行の『図書館年鑑 2007』の公共図書館統計をもとに、図書館の設置状況を見てみます。

都道府県立図書館は47都道府県すべてに設置されており、埼玉・千葉・東京・沖縄(各3館)、栃木・神奈川・福井・京都・大阪・和歌山・鹿児島(各2館)を除く、36道県は単館でのサービスとなっています。

全国7ブロック間の比較で、市区町村図書館の設置状況をみたとところ(表1)、道内の市区図書館は「中国・四国」とともに100%の設置率となっていますが、町村図書館は44.8%と全国平均を下回り、「東北」に次いで低い設置率となっています。

表1 全国の公立図書館設置状況



※『図書館年鑑 2007』より算出、図書館数・自治体数は2006年4月1日現在
 (東北:青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島 関東:茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川 中部:新潟・富山・石川・福井・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知 関西:三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山 中国・四国:鳥取・島根・岡山・広島・山口・徳島・香川・愛媛・高知 九州・沖縄:福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島・沖縄)

さらに『日本の図書館 統計と名簿 2006』（社）日本図書館協会）のデータから、道内における図書館設置状況（図1）を見てみると、地域によっては図書館サービスの大きな空白地帯があることがわかります。道内を6つの地域に分けて町村図書館の設置状況を見てみると（表2）、「オホーツク」で87.5%、「十勝」で77.8%と全国平均を大きく上回っているにもかかわらず、「道北」では20.6%、「道央」でも34.0%と大きな地域格差があることがわかります。市立図書館を含めた市町村図書館設置状況を支庁別で見てみると（表3）、特に「後志」で10.0%、「留萌」で11.1%と、大変低い状況になっています。

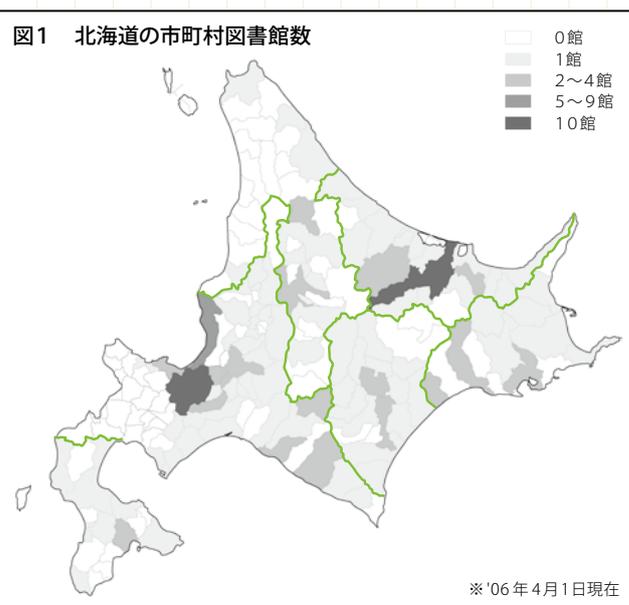
図書館サービスが浸透しているオホーツク

次に、図書館サービスの実態を職員や蔵書数、貸出状況などから探ってみましょう。

専任職員1人当たりのサービス人口（表4）では、「北海道」は約11,000人と全国平均より高くなっています。また、人口100人当たりの蔵書冊数（表5）は、276.5冊とわずかに全国平均に及ばず、人口100人当たりの貸出状況も全国平均を下回っています（表6）。貸出状況は、特に「関東」「中部」「関西」といった人口集中が見られる地域で多く、数値を見る限りでは、情報を有効に活用する、読書に親しむといった行動が、北海道をはじめとする地方部ではまだしっかりとは定着していないと推測されます。専門的な知識を生かしながら、住民に図書館を利用する利点を伝え、さらに利用者を広げていくことが図書館への理解を高める上でも重要なことのように感じます。

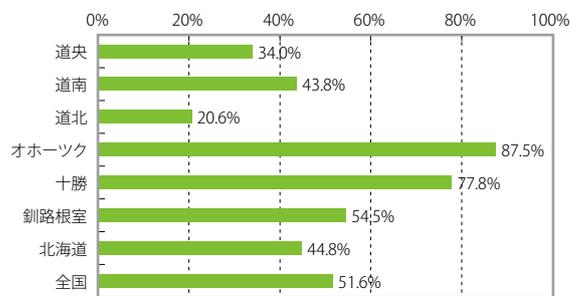
では、北海道の地域別ではどうでしょうか。設置市町村を対象にすると、専任職員1人当たりのサービス人口（表7）は、「道央」「道南」で高くなっています。一方、人口100人当たりの蔵書冊数（表8）と人口100人当たりの貸出状況（表9）は「オホーツク」が群を抜いているといえるでしょう。オホーツク地域では図書館設置率が高く、図書館サービスが浸透している地域といえるのではないのでしょうか。

図1 北海道の市町村図書館数



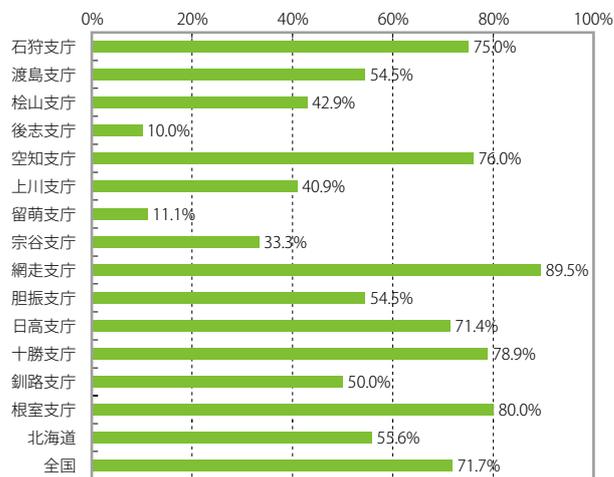
※'06年4月1日現在

表2 北海道の地域別町村図書館設置率



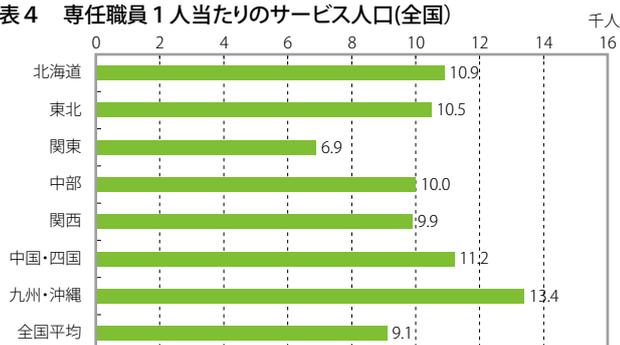
※『日本の図書館 統計と名簿 2006』より算出。'06年4月1日現在。

表3 支庁別の市町村図書館設置率



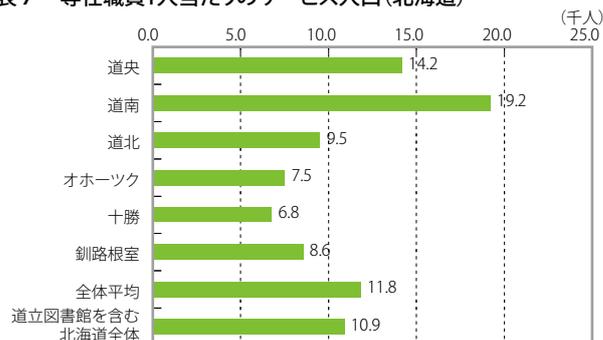
※『日本の図書館 統計と名簿 2006』より算出。'06年4月1日現在。

表4 専任職員1人当たりのサービス人口(全国)



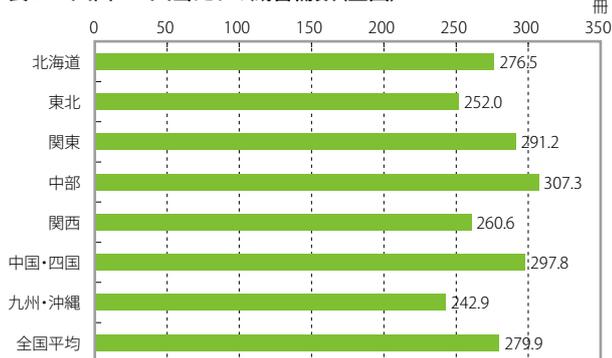
※専任職員数は'06年4月1日現在。人口は'05年3月31日現在の各都道府県総人口を用いた。

表7 専任職員1人当たりのサービス人口(北海道)



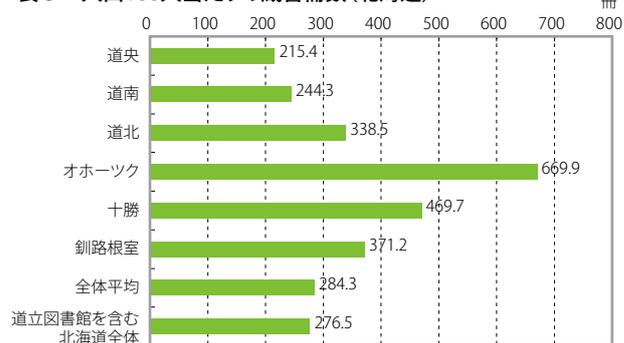
※専任職員数は'06年4月1日現在。人口は'06年6月の住民基本台帳の人口数を用いて、設置市町村のみで集計した。なお、道立図書館を含む北海道全体は、'06年6月の住民基本台帳人口の北海道全体(図書館を設置していない市町村も含む)。

表5 人口100人当たりの蔵書冊数(全国)



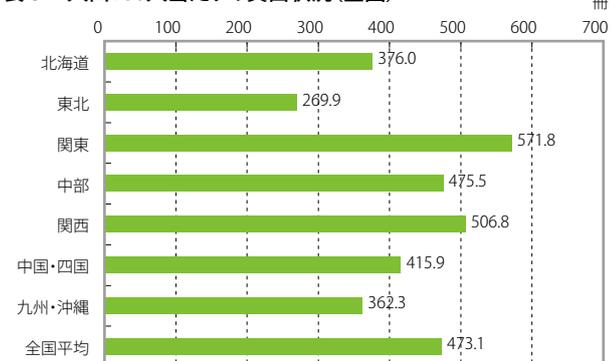
※蔵書数は'06年3月31日現在の都道府県図書館、市区町村図書館の蔵書数を用いた。人口は'05年3月31日現在の各都道府県総人口を用いた。

表8 人口100人当たりの蔵書冊数(北海道)



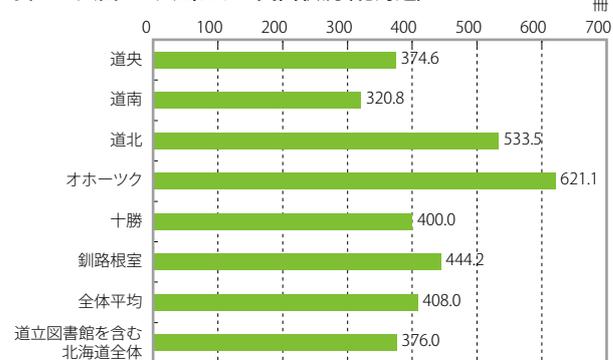
※蔵書は'06年3月31日現在。人口は'06年6月の住民基本台帳の人口数を用いて、設置市町村のみで集計した。なお、道立図書館を含む北海道全体は、'06年6月の住民基本台帳人口の北海道全体(図書館を設置していない市町村人口も含む)。

表6 人口100人当たりの貸出状況(全国)



※貸出冊数は市区町村図書館の'06年3月31日現在の館外個人貸出数。人口は'05年3月31日現在の各都道府県総人口を用いた。

表9 人口100人当たりの貸出状況(北海道)



※貸出数は'06年4月1日現在。視聴覚資料も含む。人口は'06年6月の住民基本台帳の人口数を用いて、設置市町村のみで集計した。なお、道立図書館を含む北海道全体は、'06年6月の住民基本台帳の北海道全体(図書館を設置していない市町村人口も含む)。

厳しい財源事情

次に、人口1人当たりの資料費(表10・11)で財源状況を推察してみると、都道府県立図書館では「北海道」が最も低く、市区町村図書館でも全国平均を下回っており、財源的に厳しい状況がうかがわれます。北海道は広大な面積にもかかわらず、市区町村図書館をサポートする道立図書館は道央に1館のみで、都府県とは大きく状況が異なります。図書館サービスにおいても、実態を掘り下げながら北海道独自の運営が求められているように感じます。

また、道内を地域別に見てみると、資料費の面でも「オホーツク」がダントツとなっており、図書館への理解が深い地域といえるでしょう。

レファレンスは図書館と利用者の相互で変化を

ここからは、昨年末に釧路公立大学地域経済研究センターが行ったアンケート「これからの時代の公立図書館に向けて」の速報結果から、市町村図書館の実態や今後の取り組みについての考え方などがうかがわれるいくつかのデータを紹介していきます。同アンケートは、釧路公立大学地域経済研究センターの自主研究「地域の自立的な発展に果たす図書館の役割についての調査研究—知の情報拠点としての北海道における公立図書館の現状分析—」の一環で行われ、『図書館年鑑2007』に掲載されている道内の市町村立図書館119館を対象に郵送で配布し、86館から回答を得たものです(回収率72.3%、調査期間'07年12月11日～'08年1月15日)。レファレンスサービス、児童・青少年サービス、他の図書館との連携、住民ボランティアなどについて簡単な質問を行っています。

まず、レファレンスサービスですが、窓口が設置されているのは全体の2割弱にとどまりました(表12)。しかし、利用状況(表13)は「よく利用されている」と「利用されている」を合わせると、市立図書館で73.7%、町村立図

書館で41.7%となっています。今後(表14)は「より充実させていくべき」「今より充実させていくべき」と約8割が回答しており、レファレンスサービスの充実が必要であることを実感しているようです。

しかし、自由に記述してもらったレファレンスサービスの課題では、限られた職員数や予算、職員のレベルアップの必要性などが挙げられ、また、利用者側のレファレンスサービス認知の低さを感じている図書館もあります。これからは、利用者の側がレファレンスサービスをしっかり理解し、図書館を盛り立てていくことも必要ではないでしょうか。

児童サービスに重点、一方で子どもの読書離れも

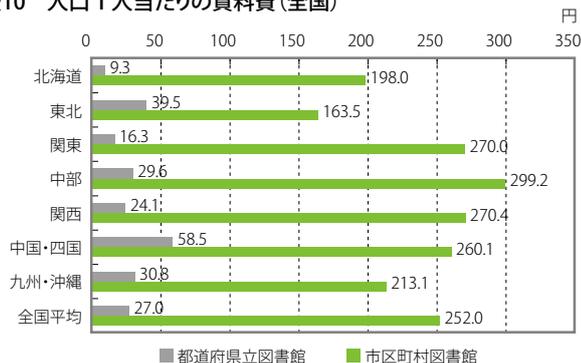
児童・青少年サービスで行っていること(表15)は、「児童コーナーの設置」「読み聞かせ会の開催」「児童書の充実」が全体の8割を超えており、多くの図書館で、サービス対象として児童に重点が置かれていることをうかがわせます。また、91.9%の図書館で住民ボランティアが活躍していますが、それらの図書館では、児童サービスの分野に住民ボランティアの8割がかかわっています(表16)。

一方で、今後充実させていきたい児童・青少年サービスを自由に記述してもらったところ、学校との連携強化や支援、ヤングアダルトサービスの充実などが挙げられました。また、「子どもたちの読書離れ」を指摘する声も見られ、こうした現状とどう向き合うかという問題にも直面しているようです。

道立図書館には連携強化と中心的機能を

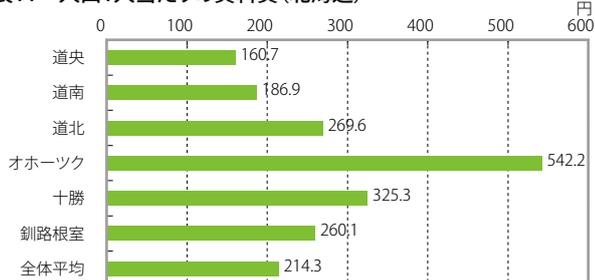
限られた職員数や予算の中では、図書館間の連携が重要と考えられます。今後連携強化を望む図書館(表17)を聞いてみたところ、市立図書館では「学校図書館」と回答した割合が高くなっています。市立図書館では、地域の学校との連携が読書推進のカギになると感じている

表10 人口1人当たりの資料費(全国)



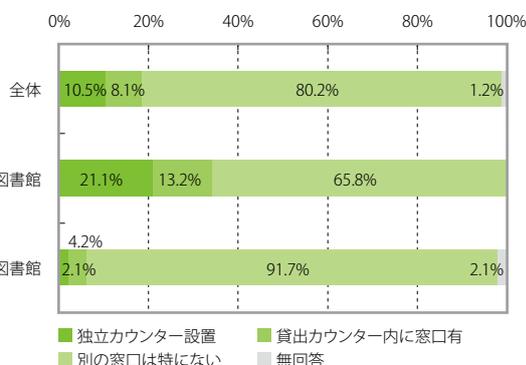
※'04年度決算額から算出。人口は'05年3月31日現在。市区町村図書館は、各都道府県の総人口当たりの数値を足し上げ、自治体数で除した数値となっている。

表11 人口1人当たりの資料費(北海道)



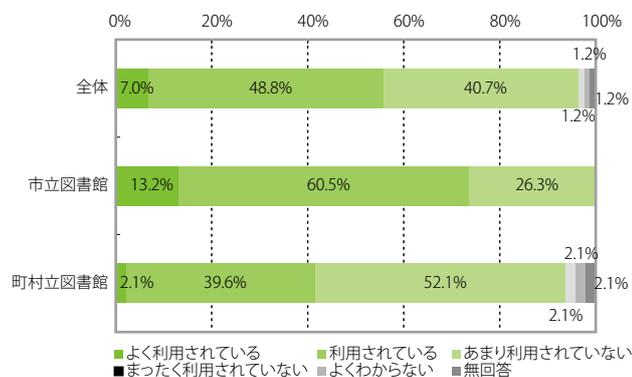
※'04年度決算額と'06年6月の住民基本台帳人口を用いて、設置市町村のみで集計した。このため、表10の全国数値とは一致していない。

表12 レファレンスサービス窓口の設置状況



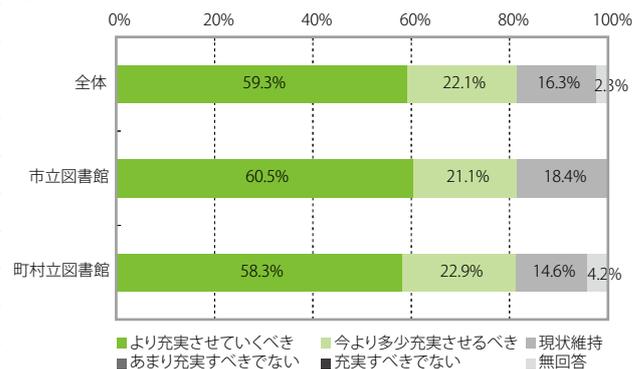
※'07年12月1日現在。

表13 レファレンスサービスの利用状況



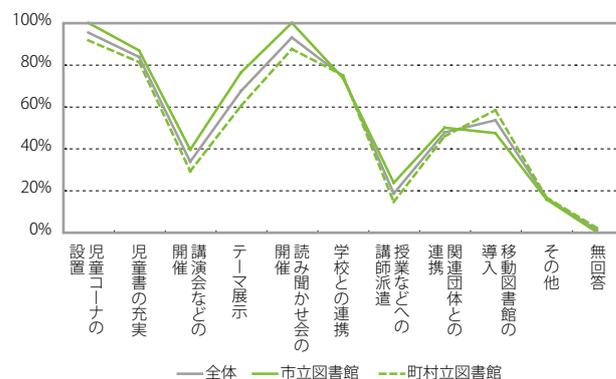
※'07年12月1日現在。

表14 レファレンスサービスの今後



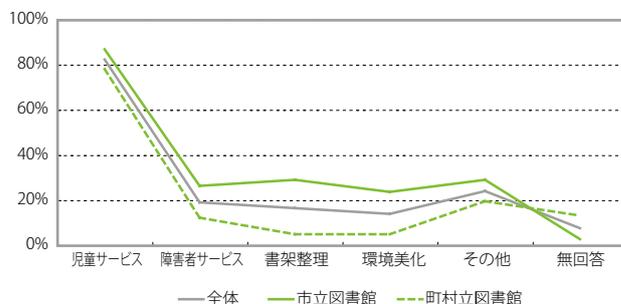
※'07年12月1日現在。

表15 児童・青少年サービスで行っていること(複数回答)



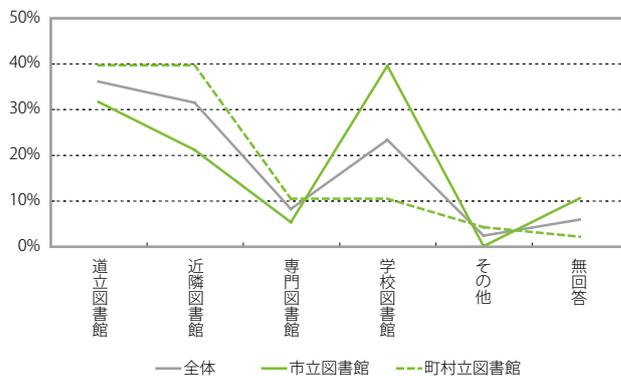
※'07年12月1日現在。

表16 住民ボランティアの活動分野(複数回答)



※住民ボランティアが活動している79館の回答。

表17 今後連携強化を望む図書館(複数回答)



※'07年12月1日現在。

と考えられます。一方、町立図書館では「道立図書館」「近隣図書館」と回答した割合が高くなっており、この点は市立図書館との大きな隔りがあるようです。

また、道立図書館に期待する活躍分野（表18）では、「市町村図書館との連携強化・支援」「蔵書の強化」「図書館連携における中心的機能」と回答した割合が高くなっています。今後、厳しい財政状況の中で図書館運営を行っていく上で、図書館間の連携が重要になってくると考えられますが、道立図書館の役割の大きさがうかがえます。

成人向け課題解決支援への道のり

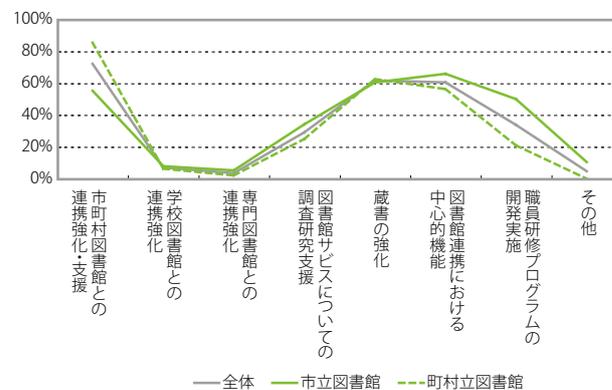
最後に、『これからの図書館像』に掲げられている課題解決支援を例に、今後充実させたい課題解決支援分野を挙げてもらいました（表19）。「学校教育支援」や「子育て支援」「地域情報支援」の回答率が高く、児童・青少年や主婦などにターゲットが絞られている感があります。「行政支援」や「ビジネス支援」「医療健康支援」など、先進的な全国の図書館が取り組んでいる成人向けのサービスには、まだ温度差があるようです。しかし、「地域情報支援」の中には、地域を元気にするような情報を提供していくという意味合いも含まれているはずです。

図書館運営について、今後のあり方や課題を自由に記述してもらった中には「新時代の図書館の方向として起業支援や医療支援がマスコミに取り上げられているが、北海道の公共図書館でそのようなサービスができるのは1館か2館程度。派手なアドバルーンに踊らされるよりも足元を見つめ直すべき」という厳しい意見も見られました。しかし、「近年、自治体の財源難を理由に図書館経営は大きな転換を迫られている。例えば、資料費の削減をはじめとして、指定管理者制度の導入など、危機的な状況の中で、図書館はその経営を厳しく問われている。しかし、その危機的な状況は、逆に新しい経営をどう展開していくかという一つの転機として見なければならぬと思う。現在、従来の貸出中心のサービスや館単独で行う事業から、地域住民が必要とする情報の提出、学校やボランテ

ィア、あるいは行政の他部署との幅広い連携、協力を積極的に推し進めていくことが強く求められている。このため、図書館行政をまちづくりにどう生かしてゆくかという視点を行政がどうもっていくかが大きな課題になっていると思う。公共図書館はもう単独では生きてゆけないと思うから」といった意見も見られています。

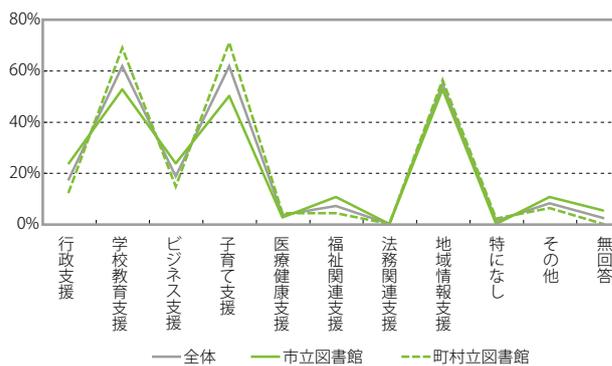
厳しい状況だからこそ、行政、図書館、住民、各種の機関や団体などが一緒になって考えていかなければならぬように思います。

表18 道立図書館に期待する活躍分野（複数回答）



※'07年12月1日現在。

表19 今後充実させたい課題解決支援分野（複数回答）



※'07年12月1日現在。